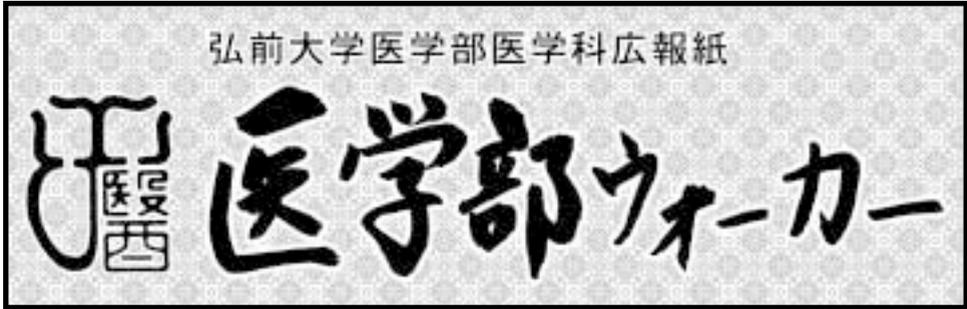


第29号

発行日：平成16年6月16日
 発行者：医学部医学科広報委員会
 印刷：やまと印刷株式会社



1面：医学部長寄稿
 2面：新病院長挨拶
 3面：弘前医学会優秀賞贈呈式
 4面～5面：実務委員会・組織委員会紹介
 6面：研究室紹介「皮膚科学講座」
 7面：留学だより
 8面：人事異動
 題字 弘前大学長 遠藤正彦氏筆

医学部長寄稿

外部資金を確保しよう

医学部長 兼子 直



いよいよ四月から弘前大学も独立法人としてスタートしました。学長、理事を中心に新たな体制で大学の運営が始まっておりますが、マスコミで報道されておりますように大学間での激しい競争が始まっております。東京大学では研究体制充実のため学長裁量分野に教員二百名を確保し、和歌山大学では受験生確保のため学長補佐として「入試のプロ」を採用したり、東北大学では学長並みの報酬で「スター教授」を世界から招致する、あるいは大学と企業が契約を取り交わした等々、連日のように大学の生き残りの策に關わるニュースが報道されております。弘前大学でも学長を中心に精力的に対策が取られております。そこでは「大学の自治」という考えが後退し、「学長を中心とした管理運営体制」を採用し、一つの大学として運営されてゆくという大きな

な変革があります。例えば、各学部の教員の定年、転出などに際してそのポストは一旦学長へ返し、各学部はそのポストの必要理由を学長に提出しなければなりません。それを学長が全学的見地から戦略的に検討し、再配置するか否かを決定することになります。これは大学の運営を効率的に行うためだけでなく、未来を見据えて大学が一つの有機体として生き残るために、あるいは大学の活性化を常に確保するために必要な流れと考えられます。

そこで医学科、附属病院でもこのような大学の動きに合わせた体制作りが進行中です。例えば、附属病院の病床は院長が一元的に管理し、医学科の教員配置は学長から委嘱されて学部長が一元管理するということになり、属病院でも先端医療開発、十分な卒業後研修の提供、時代をリードする研究展開のため講座の壁は限りなく低くし、機動的に運営されねばならなくなります。教育、診療、研究面でより一層の協関係が求められております。

このような管理運営も経済的基盤がなければ十分には生かされません。国からくる大学の予算は減額される傾向にあることは間違いがなく、一方で病院の収入は対前年比2%ずつの増が要求されております。これらの状況を考えますと、先端医療開発、時代をリードする研究展開のための研究費は、大学からの資金ではなく外部資金に頼らざるを得ません。地元にも力な企業がない本学の最も確かな外部資金獲得先は科学研究費補助金ではないでしょうか。医学部学務課がまとめた平成十五、十六年度の科学研究費補助金比較表を見てください。申請件数で六十五件の減、内定率では一四%の減でした。今年も基盤Sが内定しましたので、交付金額は増加しておりますが微妙たるものです。我々は国の科学研究を担う有力な研究者集団です。医学研究、先端医療開発において弘前大学医学科はこれまで国際的に貢献してきました。その大学で働いているスタッフは学内資金に頼らずに研究できるように、来年度こそは一人二つ以上の科学研究費補助金申請書を出し、さらに多くの研究費（医学科・附属病院で控えめに？二億円



科学研究費補助金比較表（15年度／16年度） 医学科・附属病院

（金額：千円）

	15年度							16年度							比較増減			
	件数			内定	内定率	継続新規	交付額	件数			内定率	継続新規	交付額	件数		交付額		
	申請	継続新規	新規					申請	継続新規	新規				申請	申請増減率	内定	内定増減率	金額
地域連携	0	0	0	0			0	0	0			0	0	0				
特定領域	29	0	2	6.9%	6.9%	5,300	16	2	3	18.8%	7.1%	9,500	13	-44.8%	1	50.0%	4,200	80.0%
基盤（S）	2	0	0	0.0%	0.0%		2	0	1	50.0%	50.0%	41,600	0	0.0%	1	00.0%	41,600	
基盤（A）	4	0	0	0.0%	0.0%		4	0	0	0.0%	0.0%		0	0.0%	0		0	0.0%
基盤（B）	67	8	12	17.9%	8.5%	46,500	51	10	13	25.5%	7.3%	42,500	16	-23.9%	1	8.3%	4,000	-10.0%
基盤（C）	64	17	24	37.5%	14.9%	37,700	58	14	22	37.9%	18.2%	31,800	6	-9.4%	2	-8.3%	5,900	-20.0%
萌芽	105	9	17	16.2%	8.3%	29,500	89	7	15	16.9%	9.8%	21,900	16	-15.2%	2	-11.8%	7,600	-30.0%
若手（A）	5	0	0	0.0%	0.0%		0	0	0	0.0%			5	-100.0%	0		0	0.0%
若手（B）	37	7	14	37.8%	23.3%	24,700	28	5	14	50.0%	39.1%	21,100	9	-24.3%	0	0.0%	3,600	-10.0%
合計	313	41	69	22.0%	10.7%	143,700	248	38	68	27.4%	14.3%	168,400	65	-20.8%	1	-1.4%	24,700	20.0%

基盤（B）には交付内定後、他機関に転出した研究者1名分、6,700千円を含んでいます。

附属病院長就任の挨拶

附属病院長 棟方昭博 (内科学第一講座教授)



国立弘前大学が独立行政法人化に伴い「国立大学法人弘前大学」となり、学則や諸規則、大学執行体制など大幅な変更に伴う変革の中、四月一日医学部附属病院長の辞令を交付されました。改めて独法化後の附属病院のおかれた外部環境を調べてみると、極めて厳しいものがある。税金という運営費交付金を受けている関係から文部科学省の指導の下におかれている状況に大きな変化はない。既に提出した六ヶ年の「中期計画」の達成が至上命題であり、一方で二%ずつの効率化係数が課せられ、10%に達する六年後にはこの係数をクリアするのは至難の技とも思われます。経営という重い課題の対策には民間企業人を入れた経営戦略会議を立ち上げ、病院職員一体となつて対応して行きたいと考えています。

附属病院の使命は、全医療スタッフが協力して最先端の医療を提供することにより、疾病に苦しむ病人とその家族に、どんな時でも心身の健康と希望をもたらすことです。加えて、質の高い最新医学の導入を命題としていますが、それに伴う

リスクの回避には、予防保全にも力を入れなければなりません。従前から病院に求められていた高いレベルの医療人を養成することはもちろんのこと、本年より開始された臨床研修医必修化に伴う教育カリキュラムの充実を行うと同時に、研修医の過労死の社会問題がマスコミを賑わして以来の医師も労働者という定義の下での労働基準法をクリアしながら若手医師を育成したい。

病院の施設関係では、鈴木前病院長のご努力により、新外来棟は基本設計も終え、本格着工に向けての最終的な準備段階に入っている。また、長年の課題であった駐車場問題も三層四階の立体駐車場の工事の契約を終え、今秋には完成する予定です。

国立大学時代の「日の丸」意識から脱却し、自己責任の上で病院を運営することが最も大事であり、世間で破綻している第三セクターのような先送りを避け、地道に一つ一つの課題をクリアし社会から信頼される病院にしたいと考えています。最後に、病院の使命と目標を改めて紹介し、目標の達成に努力したいと思えます。

弘前大学医学部附属病院の使命(案)

『弘前大学医学部附属病院の使命は、生命倫理に基づいた最先端の医療、医学教育

- 一、診療目標
 - 治療成績の向上を図り、高度先進医療を推進し、患者本位の医療を促進するとともに、地域医療の充実を図る。
- 二、研究目標
 - 臨床研究推進のための支援体制の充実を図る。
 - 高度先進医療開発プロジェクトチームを設置し、脳血管障害等地域特殊性のある疾患の研究・治療を通じて国際的研究を展開する。
 - 積極的に大学内外の組織と学際的研究を含めた共同研究を展開し、診療科の枠を超えた特色ある臨床研究を進める。
 - 治療管理センターを中心に臨床試験の質を高め、国際的水準の臨床試験研究を行う。
- 三、教育・研修目標
 - 卒前臨床実習及び臨床研修制度の整備、充実を図り、コ・メディカルの卒前教育並びに生涯教育への関わりを強める。
 - 明確な目標意識と使命感を持ち、人間性豊かな、コミュニケーション能力の高い医療従事者を育成する。この目的達成のため、クリニカルクラークシップ制度を積極的に導入し、
 - チーム医療に基づいた研修を行う。
 - 卒後臨床研修センターを設置し、問題解決型の生涯学習の姿勢を維持できる卒後臨床研修を行うため、地域の医療機関と協力してブライマリーケア・救急医療も含めた診療体制の充実を図る。
 - 地域の医療機関の医師に生涯教育の場を提供する。
 - 高度の知識、技術、人間性を有した専門医を育成する。特に悪性腫瘍・心疾患・臓器移植などの分野での専門医の生涯教育を充実させる。
 - 管理・運営目標
 - 病院運営機能の改善を図る。
 - 病院長を専任制とし、その権限を強化し、病院長を中心とした運営体制を構築する。
 - 病院長を責任者に経営戦略会議を設置し、病院経営を担当する理事を通じて経営方針を役員会に反映させ、病院の管理運営の充実、強化及び経営の健全化を図る。
 - 診療職員の配置を見直し、診療支援体系の効率化を図る。
 - 病院収支の改善を目指し、診療指標の完全を図る。
 - 物流システムを導入し、経費の節減を図る。
 - ホームページを充実させ、診療内容・治療成績を公開するとともに、医師、コ・メディカルの生涯教育に関する情報を提供する。

新学務委員長紹介

学務委員長 泉井亮 (生理学第一講座教授)



今年度から学務委員長(学務主任から名称変更)は学部長(医学科長)の指名となり、元村前学務主任の後任として私が指名され、花田副学務委員長他、委員も決定しました(表1参照)。どうぞよろしくお願いいたします。私は平成十三年年度の学務主任でしたので、二度目になります。

さて、学務委員会は、おもに学生達に關係した事項、すなわち、医学教育や学生の生活について活動します。これまでの委員会で、それぞれと特徴を出して活動してきました。

表2.平成16年度 学務委員会活動方針

- 今年度の目標 「教育の充実」
- 活動内容(予定)
 - 教務事項
 - 教育評価の徹底と評価に対する対応
 - カンニングの防止に関する対策
 - 進級や試験実施時期等についての検討
 - 教員の横の連携の強化
 - 教育内容について
 - 成績評価について
 - FD(1)
 - よりよい医学教育のあり方(1)(教育評価を踏まえて)
 - 模擬講義?
 - 学生と教員との対話討論
 - OSCEの充実(実施委員会との連携)
 - CBTの充実(実施委員会との連携)
 - SGT、クリニカル・クラークシップ(CC)の充実(実施委員会との連携)
 - FD(2)
 - よりよい医学教育のあり方(2)(SGT, OSCE, CBT, CCを踏まえて)
 - 学生、研修医、教員の対話討論
 - 学生事項
 - 教育環境の整備
 - 自習室(複数名がグループとして使用する)の確保
 - 空き部屋、学生研修室
 - キャンパス・クリーン作戦
 - クラス・アワーの活用
 - SD(Student Development)
 - 心を豊かにするための企画
 - 課外活動の支援

表1.平成16年度学務委員会員名簿

泉井亮	委員長	生理学第一講座
花田勝美	副委員長	皮膚科学講座
土田成紀	委員	生化学第二講座
新川秀一	委員	耳鼻咽喉科学講座
中根明夫	委員	細菌学講座
福田幾夫	委員	外科学第一講座

今度、学生の番です。学生達が心える番です。しかし、学生達にしっかりと伝え、学生達にしっかりと伝えるためには、大学が、教員が最大限の「やる気」を見せることは重要で、先生方のご協力をお願いいたします。

第139回 弘前医学会優秀発表賞 贈呈式挙行される

始めに、審査委員長泉井幹事から選考経過について説明があった後、兼子会長より益々の研究の発展を期待して橋と副賞が授与された。受賞にあたり遠野先生から、今回の賞に込めるべく更に研究を進めて行く決意が述べられ、和やかに記念撮影して贈呈式を終えた。

今般、第三百三十九回弘前医学会例会に於いて栄えある「優秀発表賞」に輝いた小児科学講座遠野千佳子先生に表彰橋と副賞が授与された。去る二月十三日開催の例会では目録のみの授賞であったため、改めて受賞者氏名と発表演題名が刻印された表彰橋と副賞を贈呈することとなった訳である。



受賞の喜びと決意を述べられる遠野先生

弘前医学会賞授与は菅原前学部長の御発案により、昨年六月の第八十七回弘前医学会総会から実施されたもので、優秀発表賞は遠野先生が四人目にあたる。本賞は優秀論文賞と優秀発表賞の二つより成り、各受賞者には大きな励みになると共に、弘前医学投稿論文数と発表申し込み演題数の増加も期待される所である。

また、本賞は弘前大学医学部同窓会である鵬桜会の全面的援助により新設されたものであり、平成十五年度は表彰橋の他、副賞として論文賞三万円、発表賞一万円相当の図書券が贈呈された。六月十九日開催の第八十七回弘前医学会総会では優秀論文賞が初めて授与されることになっている。

喜ばしいことに、本年度からは論文賞十万円、発表賞三万円と約三倍増の副賞が鵬桜会より御援助頂けることとなった。これは去る二月の受賞記念祝賀会の席

上、石戸谷鵬桜会理事長に對し兼子学部長からノーベル賞副賞に限りなく少しも近づけて欲しいという強い要請に込めて頂いた結果である。学術的評価に於いて名譽と金銭は別と言う考えもあるが、この副賞

受賞のことば

小児科学講座 遠野 千佳子

今回は思いがけずこのような名譽ある賞を頂き、とても嬉しく光栄に感じております。今回の症例はごく近年認知されるようになってきたばかりの極めて稀な疾患で、少しづつのヒントから

点で行われるべき治療をその都度調べ上げ、客観的な評価に耐え得る最善の方法を選択することが肝要で、そしてその多くを自分達の手で、他のどの施設にもひけをとらないレベルで行えるのもまた私共小児科血液グループの醍醐味と自負しています。今回の症例の患者は高度の免疫不全症ですが、同じ疾患で長期生存例の報告はなく、患児自身にも乳幼児から一才を過ぎた

現在でも日常生活にかなりの制限を強いっている状況が続いています。免疫不全の克服、それとともに小児科医本来の目標であるその後の健全な発育、発達の実現のために、ぜひとも疾患の根本的な治療を目指す造血幹細胞移植が必要と考えますが、残念ながら今の時点では血縁、非血縁ともに適切なドナーが存在しません。対症療法を続けつつ、近い将来病気が悪化する前に、公的バンクからドナーさんが得られ、よいタイミングで移植に至れることを強く期待しています。

さて、肝腎なことを忘れてはいけません。「正確な診断」とは「適切な治療」のためにこそあるもの。稀な疾患については特に、現時

が弘前医学会の若手会員にとって如何ばかりかの目標となることを切に祈念すると共に、鵬桜会々員の諸先生方に本紙面を借りて改めて感謝申し上げます。(木村 記)

造血幹細胞移植を必要とする子供達の疾患は様々です。現疾患の難しさから、なかには厳しい結果を余儀無くされる例が存在するのは確かですが、移植後まるで何ごともなかったかのようになり元気に大きく育っている子供たちが大勢いるのもまた喜ばしい事実です。そして今、そんな子たちを横目にみながら、目の前にいるこのちっちゃい子にも同じように外で思いきり自由に遊びまわれる日がやってくることを想像し、ついでに、君のおかげで賞までいただいちゃったよありがとう、とこっそり(もちろん御両親には検査、発表等きちんと御同意いただいています)彼の耳もとでささやきながら、そしてさらに、おつきな病気を抱えながらもその運命を見事に受け入れ健気に生きています、尊敬すべきたくさんの子供達にそれぞれの生涯の一部分に少なからず関与している自分の立場を充分に噛み締めながら、これからも日々の診療に取り組んでいきたいと考えております。



贈呈式を終えて

教育研究評議員としての抱負

脳研脳血管病態部門教授 佐藤 敬



四月から医学科部医学科選出の教育研究評議員を拝命しました。

国立大学法人法第二十一条によると、教育研究評議員は中期目標、中期計画、年度計画、学則及び教育研究に関する規則、教員人事、教育課程編成、学生の修学支援、学生の入学・卒業・過程修了・在籍・学位授与・自己点検評価、その他の重要事項について審議するということになっております。

四月から医学科部医学科選出の教育研究評議員を拝命しました。国立大学法人法第二十一条によると、教育研究評議員は中期目標、中期計画、年度計画、学則及び教育研究に関する規則、教員人事、教育課程編成、学生の修学支援、学生の入学・卒業・過程修了・在籍・学位授与・自己点検評価、その他の重要事項について審議するということになっております。

正式な開催がまだ二度だけなので、医学科選出評議員としての自覚に基づいた役割をどの程度果たしているかなければならないのかは明確でありません。恐らく、国立大学法人弘前大学教員としての基本に従って行くことが求められるものと理解しています。更にその基本は、大学と構成員全てがその社会的使命を強く意識することにあると理解するところから出発すると思えます。

評議員会は原則として毎月一回、定期開催されますが、当面は臨時開催があるかもしれないとの学長先生のお言葉でした。会議の他に、全学や他学部の行事にお招きを受けることもあり、これは今まで無い経験なのでどう対応すべきか迷うこともありますが、余り考えることなく都合が付けば出席することになります。

私は、自分がこのような役割に相応しい人格と思っては来ませんでした。また、他の多くの評議員の方々がそうであるように、議題を広く捉えて関連領域にまで思考や発言が及ぶことが多いありません。このことは、医学科を代表しての役割を果たす上では支障となるかもしれませんが、皆様の叱咤激励を頂いて頑張る所存です。宜しくお願い申し上げます。

在のところで、「青森県」医学総合情報センター」を考えています。弘前大学のみための施設ではなく、青森県の医療/福祉関係者のみならず、青森県民、弘前市民に役立つ情報を提供する情報センターとすることを目的とします。今後、このセンターの具体的計画(場所、設備、機能、人員など)を作り、関係団体、弘前市、青森県に協力をお願いするつもりです。単に資金援助のみを求めるとはならず、収入も得られる運営・経営が望ましいと考えています。学内にあり、おきましても、学長、理事の方々に御協力をお願いするつもりです。

図書館だより

附属図書館医学部分館長 正村 和彦

独立行政法人となった弘前大学の中期目標・中期計画の一つとして、附属図書館医学部分館とその保健学科分室の整備統合が挙げられています。これは保健学科の図書医学部分館に移動すれば解決するわけではありませんが、現在、医学部医学科の学部学生は五百七十八名、保健学科学部学生は八百四十七名で計千四百二十五名となります。これに両学科の大学院学生、研究生、教官の数を加えると、か

なりの人数となります。これらの人が利用するには、現在の分館、分室のスペース、設備ははなはだ不十分であることは明らかです。医学部図書委員会としては、単に文部科学省への概算要求のみを行ってはいけません。充分な分館の整備は困難と考えています。このため、従来の図書館の姿をさらに発展させ、青森県の医学情報を中心として青森県全域に医学情報ネットワークを持つ医学図書館の設立を考えることにしました。施設の名称は現

実務委員会・組織委員会紹介

総務委員会委員として

産科婦人科学講座教授 水沼英樹

弘前大学の独法化にとも
ない全学委員会が設置され、
その中の一つである総務委
員会委員に任命されました。
「総務」といえば会社でい
えば全体の事務を司る部署で
あり、国の「総務庁」ふう
に行けば大学の運営を総合
的、効率的に実施するため
に各部門の機構、定員、運
営に関する事務の監査を行
い、給与や統計に関する事
務等を行う部門と言ったこ
とになります。第一回の委
員会が開かれるまで、いつ
たいどのような業務を行う
べき委員会なのかその性格
は良く分かりませんでした。
委員長は昆副学長であり、
各学部、事務から一々二名
程度の委員が任命されてお
り、医学部からは小生と保
健学科の清宮教授、および
西田事務部長が選出されて
います。任期は二年。

第一回の顔見せ委員会を
含めて五月底現在三回の
委員会が本部で開催されま
したが、これまでの委員会
を通して分かってきました
ことは、本委員会の業務は
本学の将来を見据え、現在
問題となつて居る事柄に付
いて意見の交換を行い、そ
れを学長に具申する委員
らしいということ。したが
って、その内容は総合
文化祭、管理職の手当ての

支給問題から、人件費の問
題、学部の枠組みの問題、
その評価法の問題等身近な
問題から大学の将来像にわ
たる問題までさまざまに幅
広問題に付いて討議がな
されております(予定で
す)。大学の予算や教育、研
究など核心的な問題につ
いてはそれぞれ独立した全
委員会が設置されているの
で、総務としてはあくまで
も全体的に鳥瞰しつつ問題

解決の糸口を探しあてる、
というのがその職務であ
ると自覚してきました。初
回の委員会では委員長から
、各委員は各学部から選出
され構成されていますが判
断には学部の利害を超えて
対応していただきたいと、
本委員会の姿勢に付いての
強い要望がありました。従
いまして、出身母体を裏切
る意見を述べた場面がある
かもしれませんが、その節に
はどうぞご容赦ください。医
学部の先生方とは連絡を密
にして委員会に臨むつもり
であります。御協力の程を
どうぞ宜しくお願い申し上げ
ます。

医学部附属病院選出

財務委員会委員として

医学部附属病院歯科口腔外科教授 木村博人

国立大学法人弘前大学の
実務委員会は五委員会設置
されているが、財務委員会
のみが附属病院長の推薦教
員が構成員に含まれる。そ
れは本学の平成十六年度総
事業収支予定額約三百一億
円の内、附属病院収入とし
て百二十五億円弱が見込ま
れており、受託事業収入(奨
学寄附金、産学連携費など)
も含めるとその比重が非常
に大きいのである。

読者の方々は既に御存知
だと思ふが、従来の大学運
営の財政的仕組みが法人化
によつて根本的に異なつた
点は、本学の自己収入が直

財務委員会委員として

薬理学講座教授 元村成

四月一日付で国立大学法
人弘前大学の弘前大学財務
委員会委員の通知書を頂い
た。任期は二年である。委
員長は財務担当理事の三國
治事務局長である。各学部
から一名委員が選出され、
医学部からは医学部が元村、
保健学科から皆川智子教授、
附属病院から木村博人教授、
それに本部事務局から四名
と医学部から山崎賢司医学
部管理課長が入っている。
附属病院と医学部事務局
委員が出て居るのは実務委
員会として異例である。つ
まり十三名の委員のうち医
学部関係は四名であるが、
財務委員会の運営に関する
申し合わせで、各委員は各
部局の代表者として選出さ

れたのではないのである。
大学の財務に関する諸問題
を解決できる見識を有する
者として選出され、学長の
下に置かれた実務委員会と
して、財務担当理事を補佐
するとともに、学長の諮問
事項を審議するのである。
この委員会は、委員会とし
て議決をしたり、各部門の
財政上の利害を調整するこ
とを本来の目的としたもの
ではないのである。各部門
の教授会への報告義務もな
いという。その延長線上で
先ず、委員会成立基準が委
員の過半数とされ(議決し
ないのだから弘前大学委員
会規則にあるような二ノ三
はいらないのだぞうだ)、委
員の代理出席も、医学部(病
院)事務方のオブザーバー
出席も認められなかった。
さて、このような財務委
員会に私に科せられた役割
は何なのだろうか。当面の
検討課題は、平成十六年度
予算実施計画原案の検討で
ある。総収入は三百一億、
そのうち自己収入百六十五
億(検定料一・三億、入学
料五億、授業料三十三億、
附属病院収入百二十五億、
等)、受託事業収入九・五億
(奨学寄附金六億、産学連携
三・五億)、そして文科省か
らの運営交付金百十八億、
更に施設費事業八十三億円
である。これらの収入の配
分を検討するわけであるが、
殆どの部分は決まってい
るといい。外部資金か
らの間接経費は八八はこ
れまで同様五%となる見込
である。

教育・学生委員会委員として

生理学第一講座教授 泉井亮

「教育・学生委員会」は、
その名の通り、全学の教育
に係るさまざまな事項を企
画し、実施する実務委員会
です。委員会は各学部の二
十一世紀教育センターの代
表(教授)と事務代表、総
勢十四名で構成されており、
医学部からは私(医学科)
と、對馬教授(保健学科)、
長尾学務課長が入っています。
委員会の活動は、大学が
「弘大卒業生の資質を保證で
きる」(遠藤学長)、これま
で以上に充実した教育を提
供することを目指していま
す。具体的な委員会の作業
項目は、以下の七項目です。

- (一) カリキュラムの検討
- (二) 教育授業改善
- (三) 教員FD講演会・シンポジウム
- (四) 学寮
- (五) 学園だより
- (六) 課外活動
- (七) 入試選抜方法検討

研究・施設マネジメント委員会委員として

内科学第二講座教授 奥村謙

本委員会は中澤勝三理事
(人文学部教授)を委員長と
し、各学部選出の六名の委
員と事務局六名の合計十三
名の委員で構成されていま
す。委員会発足からまだ一
ヶ月余りで、実質的な活動
はこれからですが、その役
割と目指すところを紹介し
(次ページへ続く)

のままですが、二十八日の
財務委員会予算実施計画
(案)を作成して学長に提出
し、経営協議会・役員会を経て
六月二十日には決定します。
ヒアリングで委員の意見が
何処まで反映されるのかも
疑問であるし不明です。事
務方の不同意という局面も
有りだそう。この医学
部ウオーカーが発行される
頃には平成十六年度の予算
に関する財務委員の仕事は
終わっています。次は平成
十七年度分ですが、平成十
七年一月から始まり三月末
には決まり、四月から執行
されます。どちらにしても、
何処まで関与できるの
でしょう。財務部事務方の案を
シャーンシャーンと承認
で終わりでいいのが正念場
ではありません。

担当はカリキュラムの検討
で、これから全学のコア・
カリキュラムの検討に取り
組みます。

(前ページより)
たいと思います。

国立大学法人化に伴い、各大学の自由裁量が増す一方、教育・研究に関わる施設、設備の管理責任も増加します。例えば、新しい研究施設・設備を開発する場合、これまでは歳出概算要求等を行い、文科省の承認・指導の下に実施する必要がありました。これからは運営費交付金の効率的運用や外部資金の活用により、自ら企画し、管理運営することが可能となります。このためには広く学内の意見を集約するとともに、大学の将来を見据え、中期計画を達成し、中期計画を実現するための機動力、牽引力が必要となります。

社会連携委員会委員として

生化学第一講座教授 高垣 啓一

国立大学法人弘前大学は地方の中規模総合大学として、教育、研究、及び地域貢献の三本の柱を据えることを中期目標に掲げた。この三本柱の一つである地域貢献の現状評価が運営諮問会議によってなされた。大変厳しいものであったが、これを真摯に受け止め、これからの生き残りやかけた改革のヒントとしなければ弘前大学の存続は危うい。法人化のもとの地域貢献事業は、社会連携担当理事、及びその下に置かれる実務委員会・社会連携委員会が担うことになった。委員長・久慈一英理事(前財)21あおもり産業総合支援センター(専務理事)、副委員長・加藤陽治(地域共同研究センター(長)の他、各学部の教員と職員、総勢十二名

本委員会は意見集約と同時に、教育・研究の基盤となる施設・設備の整備と充実に必要があります。さらに急速に進歩する医学研究と平行して、附属病院の施設・設備の整備と拡充をリアルタイムで進めなければなりません。このような課題を解決するための方策の検討や、経費や予算要求等に本委員会が関与することとなります。弘前大学の研究を三戸町で開催された。一月十七日は、黒石病院のご協力、ご支援のもと、奈良院長先生の肝いりで病院職員の皆様のお手伝いをいただき昨年同様スポカールイン黒石にて行われた。本年度は、弘前大学医学部主催の講演会で行われた受講者のアンケート結果から、最も希望の多かった「生活習慣病」を取りあげ、「続・生活習慣病」を中心として、第一回東北大学バイオサイエンスシンポジウムが開催され、約二百題の研究紹介があった。各大学ともしのぎを削る中、弘前大学でも研究活動を社会に還元することを目的に、九月六日、弘前市文化センターにて「見てみて、聞いてみて、触ってみて、弘前大学」が開催される。遅れがちであった本学の地域連携事業への取り組みもこの様な具体的な形として現れ始めており、社会連携委員会として、今後地域と大学、双方の活性化を目指して積極的に行動していきたい。

平成十六年一月十七日、一月二十四日の両日、弘前大学医学部医学科「健康医療講演会」、いわゆる、医学部出前講座が、黒石市および三戸町で開催された。一月十七日は、黒石病院のご協力、ご支援のもと、奈良院長先生の肝いりで病院職員の皆様のお手伝いをいただき昨年同様スポカールイン黒石にて行われた。本年度は、弘前大学医学部主催の講演会で行われた受講者のアンケート結果から、最も希望の多かった「生活習慣病」を取りあげ、「続・生活習慣病」を中心として、第一回東北大学バイオサイエンスシンポジウムが開催され、約二百題の研究紹介があった。各大学ともしのぎを削る中、弘前大学でも研究活動を社会に還元することを目的に、九月六日、弘前市文化センターにて「見てみて、聞いてみて、触ってみて、弘前大学」が開催される。遅れがちであった本学の地域連携事業への取り組みもこの様な具体的な形として現れ始めており、社会連携委員会として、今後地域と大学、双方の活性化を目指して積極的に行動していきたい。

「健康医療講演会」

弘前大学医学部公開講座推進委員会 委員長 花田 勝美 (皮膚科学講座教授)

臨床講座を含め、研究組織・施設・設備の再編成を行う必要があり。さらに急速に進歩する医学研究と平行して、附属病院の施設・設備の整備と拡充をリアルタイムで進めなければなりません。このような課題を解決するための方策の検討や、経費や予算要求等に本委員会が関与することとなります。弘前大学の研究を三戸町で開催された。一月十七日は、黒石病院のご協力、ご支援のもと、奈良院長先生の肝いりで病院職員の皆様のお手伝いをいただき昨年同様スポカールイン黒石にて行われた。本年度は、弘前大学医学部主催の講演会で行われた受講者のアンケート結果から、最も希望の多かった「生活習慣病」を取りあげ、「続・生活習慣病」を中心として、第一回東北大学バイオサイエンスシンポジウムが開催され、約二百題の研究紹介があった。各大学ともしのぎを削る中、弘前大学でも研究活動を社会に還元することを目的に、九月六日、弘前市文化センターにて「見てみて、聞いてみて、触ってみて、弘前大学」が開催される。遅れがちであった本学の地域連携事業への取り組みもこの様な具体的な形として現れ始めており、社会連携委員会として、今後地域と大学、双方の活性化を目指して積極的に行動していきたい。

平成十六年一月十七日、一月二十四日の両日、弘前大学医学部医学科「健康医療講演会」、いわゆる、医学部出前講座が、黒石市および三戸町で開催された。一月十七日は、黒石病院のご協力、ご支援のもと、奈良院長先生の肝いりで病院職員の皆様のお手伝いをいただき昨年同様スポカールイン黒石にて行われた。本年度は、弘前大学医学部主催の講演会で行われた受講者のアンケート結果から、最も希望の多かった「生活習慣病」を取りあげ、「続・生活習慣病」を中心として、第一回東北大学バイオサイエンスシンポジウムが開催され、約二百題の研究紹介があった。各大学ともしのぎを削る中、弘前大学でも研究活動を社会に還元することを目的に、九月六日、弘前市文化センターにて「見てみて、聞いてみて、触ってみて、弘前大学」が開催される。遅れがちであった本学の地域連携事業への取り組みもこの様な具体的な形として現れ始めており、社会連携委員会として、今後地域と大学、双方の活性化を目指して積極的に行動していきたい。



弘前大学医学部医学科の出前講座ポスター

「生活習慣病」について、神経精神学講座助教授の矢部博興先生が「心の健康」について、「うつ病」をそれぞれ講演された。いずれも現社会の問題点を浮き出し、内容で約八十名の聴衆は熱心に聞き入っていた。質問も多数あり、関心の深さを窺い知ることができた。黒石市での公開講座は昨年引き続き行われたが、す

つかり定着した行事になりつつあるように思えた。一月二十四日は三戸町の「ジョイワークさんのへ」にて開催された。三戸町での公開講座は初めての試みであり、会場の設営など打ち合わせに不十分な点が残されていたので不安があった。医学部公開講座を通して南地区との連携を強めるようにとの指示は遠藤医学部長にさかのぼる。一昨年は八戸市民病院、昨年は三沢市立病院と共催してきた。酷暑のなか、ご講演をお願いしたのは、脳血管病態部門の佐藤 敬教授、青森労災病院第三内科部長日向豪史先生で、それぞれ、「脳卒中について」および「生活習慣病からあなたを守るポイント」の二題についてお話いただいた。聴衆は、高杉院長先生のお声がけもあ

り、職員の皆様に加えて二百名余にのぼる町民にお集まりいただいた。佐藤教授によれば、偶然にも三戸地区が本県で最も脳卒中の頻度の高かった地域とのこと。高い関心がもたれた。その後、三戸病院主催の交流会を開いていただいた。いずれにしても、開かれた弘前大学医学部の姿勢を理直に受けたいという目的は達成された感がある。今後と

も継続することが、地域の大学の医学部として信頼の維持に貢献すると確信する。四名の講師の先生、心強いご支援を賜った両病院の院長先生、講演者のご推薦をいただいた第三内科須田教授、精神神経科兼子教授に感謝致します。なお、この度の医学部出前講座は、青森医学振興会のご援助をいただいたことを付記します。

と き：平成 16 年 1 月 24 日 (土)
と ころ：ジョイワークさんのへ 多目的ホール
講演 1 脳卒中について
医学部附属脳研脳血管病態部門 佐藤 敬 教授
講演 2 生活習慣病からあなたを守るポイント
青森労災病院 第三内科部長 日向 豪史 先生

黒石市および三戸町における 演者ならびに講演内容

過半数代表選出者として

本町地区過半数代表 泉 井 亮 (医学科生理学第一講座教授)

今年の二月でしたが、「過半数代表者選出のための代表者選出のための選挙」という、皆さん(私も)、おそらく、何のこともかさっぱり分からない選挙がありました。そして、三月末、各勤務分野から選ばれた代表選出者による「過半数代表者選出のための代表者会議(代表者会議)」が開かれ、私が本町地区過半数代表者(職員代表者)に選ばれました。その後の経過につきまして、ご報告いたします。まず、何のために過半数

代表者(職員代表者)を決めたかといいますが、国立大学法人弘前大学の発足に伴い、大学側と職員(労働側)の間で交わされる「労使協定書」に労働側(文京地区と本町地区を分けています)を代表して調印し、大学側が提示している就労規則について意見を提出するためです。この作業は急を要するものでした。しかし、「労使協定書」の調印や、就労規則についての意見の提出は、職員全体の意見を反映した

ものでなければなりません。そこで、代表者会議を開催し、出来るだけ多くの職員の見解を集約を図りました。このときの協議の結果を踏まえて、平成十六年三月三十一日に、「労使協定書」について仮調印しました。仮調印とした理由は、本町地区では特に附属病院で法人化移行に対応すべく人員配置等の準備が進んでいることと、今後の検討で、もし問題があれば規則等の修正も可能である、との考えが学長から示されたからです。その後、代表者会議を二回開催し、「労使協定書」、「職員就業規則」、「契約職員就業規則」、「パートタイム職員就業規則」を、人事関係、労働条件、服務規程の三項目について(担当グループ分け)検討しました。検討の過程で得られた問題点、たとえば勤務成績不良によ

る解雇や契約職員、パートタイム職員の三年での雇止め、などを大学側に提示し、これに対して大学側からの対応があり、一部規則の変更となりました。また、文京地区職員から提出された多くの意見についても、いくつかの改善がみられました。そこで、平成十六年四月十五日、「労使協定書」を追認し、意見書(すでに掲示等しております)をお読みください)を提出しました。これまでの経過につきまして、本町地区職員の皆様、

どうぞご理解ください。なお、多くの職員にとりまして(大学側も)法人化ははじめてのことです。いろいろ問題がこれから生じてくると考えられます。大学あつての我々であることは事実ですが、より良い労働環境を得ることは、我々の労働意欲を高め、これが必ず大学の発展につながると思います。これからも代表者会議(委員名簿参照)は皆様のご意見の窓口となりますので、どうぞよろしくお願

本町地区職員代表者会議委員名簿
医学科 泉 井 亮 高 謙 敏 彰 一
井 村 柳 高 英 幸
奥 四 ツ 辺 川
保健学科 山 祐 山 祐
アイソトープ総合実験室 佐 山 洋
事務部 馬 川 幸 雄 男 志
對 古 石 文 孝 博 文 猛 美 子
棟 葛 小 安 安 砂 岡 平 朱 文 子 子 嗣 子
方 西 林 田 部 田 村 鍋 朱 文 子 子 嗣 子
煉 葛 小 安 安 砂 岡 平 朱 文 子 子 嗣 子

本町地区職員代表者会議委員名簿
医学科 泉 井 亮 高 謙 敏 彰 一
井 村 柳 高 英 幸
奥 四 ツ 辺 川
保健学科 山 祐 山 祐
アイソトープ総合実験室 佐 山 洋
事務部 馬 川 幸 雄 男 志
對 古 石 文 孝 博 文 猛 美 子
棟 葛 小 安 安 砂 岡 平 朱 文 子 子 嗣 子
方 西 林 田 部 田 村 鍋 朱 文 子 子 嗣 子
煉 葛 小 安 安 砂 岡 平 朱 文 子 子 嗣 子

研究室紹介

皮膚科学講座

教授 花田勝美



講座会議前の皮膚科集合写真。若き6名の皮膚科医が加わる。

平成十六年四月現在の皮膚科学講座構成は医学部が、花田(教授)、中野(助教授)、武田(助手)、金子(助手)からなり、これに二名の病院講師(ひとり留学中)と二名の病院助手が加わる。皮膚科の大学院生は三名であり、臨床と研究のひとり二役をよくこなしている。

講座が多様な分野を含んでいたことを物語っている。全国的にみれば、さらに、(皮膚)アレルギー外来や膠原病外来などが独立している所もあり、皮膚科学講座の将来はこの先次第に身が細って行くのではないかと懸念される。しかしながら、これは専門性が特化してゆく時代の流れである。他方では、赤あざ、黒あざなどに対するレーザー医学、遺伝性皮膚疾患の遺伝子治療、アトピー性皮膚炎や皮膚癌に対する遺伝子治療や光線治療などが新たに加わっている。新たな治療分野は、新たな研究分野を創生する。これまであきらめられていた皮膚疾患を治療の対象と

できる奇跡が生まれつつある。帷子康雄教授の時代は、講座内がしつかりとまとまり、優秀な関連病院が増えつつあった。さらに、昭和六十一年に橋本功教授が就任されてからは、海外への留学が盛んとなり、新しい研究分野が講座内にもちこまれた。現在の研究の中核をなしている光医学や分子生物学的研究はこのような歴史の上に築かれたものである。平成十二年に花田が

皮膚科を担当してからの研究グループは、三つに分かれている。「光(ひかり)研究グループ」では、光線過敏性皮膚疾患の遺伝子診断、紫外線防御を目的としたNF-B、テコイヤストレス蛋白(メタロチオネイン)、ヒートショックプロテイン、核内転写因子研究グループでは、乾癬や先天性表皮水疱症の発症機序の解明や遺伝子診断、「臨床研究グループ」では、光力学、音響力学療法法の開発が、それぞれ行われている。モットーは、「売れる仕事」である。臨床研究では、学内の諸先生のご協力をいただき、人類共通の悩みである、しわ・しみ、のびのびとした新しいストラテジーを生み出しつつある。実験室は限られたスペースしかないが、独立行政法人化に伴い、フードの設備が必要とのことで、大規模な改修を余儀なくされた。そのため、二ヶ月に渡って使用が制限され、その間、第二生化学土田教授を始め、多くの先生にご迷惑をおかけした。この場を借りてお礼を申し上げたい。加えて、本年度から、研修制度が施行されることとなった。皮膚科では前倒して先駆けて行っていたにもかかわらず、下支えがいないため、マンパワーの面で大きな痛手となっている。当然、研究、教育の両面にも支障をきたしている。大海に出た皮膚科医の卵が、他科の指導者のもとでさらに逞しく育ち、無事に講座に

復帰してくれることを念じている。この頃である。大学院生として継続して研究に参加してくれなければ、あつという間に研究は先細りとなってしまう。教室では、今後の非常事態に備え、ネット上で教室紹介に加えて研修後の医師を募集している(ホームページ「弘前大学医学部皮膚科」)。将来は、共通の興味を抱いた他学の勇志も参加してくれることを期待している。

第50回 卒業記念謝恩会

平成十六年三月二十三日夕方、ホテルニューキャッスルにて行われた。卒業のうれしさもさることながら、それを凌駕する国試の不安を抱えた謝恩会であった。にもかかわらず、さすがは弘前大学医学部卒業生。列席の先生方との交歓会は華やかな雰囲気一色で、微塵の不安も見せなかった。それでも、兼子医学部長から、眼をつぶって国試の自信を問う質問にはオズオズと半数程の学生が自信の程をみせただけに止まり、この年の国試の難しさが浮き出る形となった(これは後日記憂に帰すのだが)。しかし、医学部長、遠藤学長のお墨付きが下ると、歓喜の音が上がった。棟方新病院長の乾杯とご挨拶とともに、交歓会が始まり、昔話、将来の夢と話題は尽きなかった。謝恩会では、年々、女子学



兼子医学部長の軽妙な話に惹かれて

卒業生進路調査

国立弘前大学の独立行政法人化、また、臨床研修制度のスタートなど流動的な構造改革の中、平成十五年卒業生百名の内九十四名が医師国家試験に合格(合格率九十四%)し、新たな道へとその第一歩を踏み出した。合格者九十四名のうち、青森県内に残った人数は四十名であった(昨年は三十七名)。一方、県外に出た人は未定者五名を含め五十四名で、そのうち関東地方が二十一名と最も多く、ついで県外の東北(青森県以外)に進んだ人が十三名であった。卒業生の医師国家試験の結果、および、青森県内への残留率の向上は、生き残りをかけて改革が進んでいる弘前大学の、最も

地域別	人数 (%)
青森県	40 (40)
青森県内訳	
弘前大学医学部附属病院	18
八戸市立市民病院	8
むつ総合病院	6
青森市民病院	2
青森県立中央病院	2
津軽保健生活協同組合 健生病院	2
十和田市立中央病院	1
津軽自治体病院群	1
北海道	6 (6)
東北(青森以外)	13 (13)
関東(東京以外)	14 (14)
東京	7 (7)
中部	3 (3)
関西	4 (4)
中国・九州・沖縄	2 (2)
不合格	6 (6)
未定	5 (5)

目に付きやすく、他と比較されやすいものだけに、本学の全職員のさらなる努力が求められる所である。(高垣 記)

医学部長から国試の自信を問われ 神妙な面もちの卒業生

生(花田勝美 記)の華やかな服装が眼を引いてきたが、本年は着物姿に加えて、チャイナ服やベトナム風アオザイ、インド風サリーなどがみられ、国際性が色をそえた。このたびの卒業生はマッチングの結果を受けて全国に散ることから、医学部教員の願いは、一様で、「研修後はこの地域に貢献してほしい」ということに尽きていたようだった。なにかと目立つ学年であった第五十回医学部卒業生に幸あれ!そして、母校の弘前大学に還つてくれ!と祈らざるを得なかった。二次会はワイ

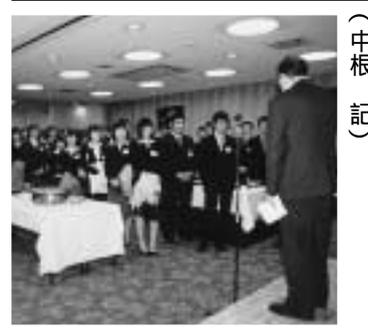


ウォーカー記者を囲んで

- #### 謝恩会次第
- 一、開会の挨拶
 - 一、医学部長祝辞
弘前大学医学部長 兼子 直 様
 - 一、乾 杯
弘前大学附属病院長 棟方昭博 様
 - 一、ご来賓祝辞
弘前大学学長 遠藤正彦 様
 - 一、謝 辞
卒業生代表 渡辺健一
 - 一、記念品贈呈
 - 一、閉会の挨拶

平成十六年度 新入生歓迎会

四月六日(火)午後五時から医学部コミュニケーションセンターにおいて、医学部医学科新入生八十二名(男子六十三名、女子十九名)の歓迎会が学友会および鵬桜会の主催で開催された。当日は入学式、二十一世紀教育ガイダンスがあり、記念すべき長い一日の最後のイベントである。登校初日なので、学生諸君は全員早々と会場に現れ、胸をときめかして待っているという予想に反し、遅刻者が出たために、開始時間が予定の五時を回ってしまっ



榎本崇一学友会会長のフレッシュな開会の言葉のあと、兼子 直医学部長のあいさつの第一声は、遅刻者への叱責であった。医学部長の叱責は、学生教育に対する医学科の毅然とした姿勢を示すものである。遠藤正彦学長はご多忙の中を縫って駆けつけ、入学式告辞とは違った愛情表現で、新入生を祝った。続いて石戸谷忻一鵬桜会理事長のユイモアたっぷりな挨拶と、西校会からの記念品贈呈、

澤一治鵬桜会理事(保健学科教授)による鵬桜会紹介スライド上演があった。最後に医学科教授の挨拶があり、学生としての心得や顧問をしている部活動の紹介などについて話された。引き続き、一階の小会議室で鵬桜会主催の歓迎パーティーが開かれ、新入生は、教授連、同窓会の先輩の先生達、上級生に囲まれて、和やかな雰囲気の中で終了した。新入生諸君には、入学式と新入生歓迎会の感激と医学を学ぶというモチベーションを六年間忘れずにいて欲しい。在学生諸君も、入学当時の感激と医学教育を受けられるというときめきを思い出して欲しい。また、教員のほうも、学生の医学教育へのモチベーションをさらに高めるような教育を心がけなければならない。(中根 記)

オタゴ大学より

弘前大学医学部解剖学第一講座助手

目黒 玲子

オタゴ大学の解剖学講座 Department of Anatomy and Structural Biology に来てもうすぐ二ヶ月になります。オタゴ大学はニュージーランドで最も歴史のある総合大学で、各学部の建物や関連施設がダニーデン市に広い大学街を作っています。特にメディカルサイエンス

をしています。気に入っているのは山だらけで急な坂道が多い点です。百メートル上ったと思ったら百メートル下る、それを何度も繰り返すような地形です。多くの建物は坂の途中や丘の上に見えます。部屋から見える夜の丘は家や街灯のオレンジ色の明かりが空に並んでいて、とても綺麗です。一度 UFO と勘違いし写真を撮りました。



解剖学講座

に優れ、大病院の屋上には遠方クワイストチャーチなどからの緊急の患者さんを迎えるヘリポートも設置されています。時々早朝深夜にもヘリコプターの音が聞こえてきます。ダニーデン市は国内では五番目に大きい都市ですが、規模は弘前と同じ位です。教会や大学等の建物、特有の地形、自然は大変美しくいつも感動します。また道路が広く、町並みも広々と

は百人以上の教職員と五十人以上の大学院生が所属する大規模な講座で、複数のリサーチグループから構成されています。私がお世話になっている Neuro-muscular research group では、準教授の Ian McLennan 先生と共同研究者の小石恭子先生を中心に、特に運動ニューロンとそこに発現する TGF (神経成長因子の一つ) に注目して、研究をしています。私は現在、成体マウスの各

部位の運動ニューロンにおける TGF superfamily の受容体の発現の差異を免疫組織化学的に調べています。高等脊椎動物では個体発生過程に莫大な数の運動ニューロンが生理的に死ぬことが知られています。これらの運動ニューロンに注目し、マウス胚及び幼若マウスにおける TGF superfamily 受容体の発現を調べるためのサンプル採集も行っています。メンバーはニュージーランド・日本・フランス・中国・台湾・イギリスの合計九人のとても国際的な研究室です。アジアの大学院生の皆さんには多くの面で助けて頂いています。ラボと同じ階には Anatomy museum があります。

どニコツと笑顔で迎えてくれます。私には全く無い要素でしたがこれは悔い改めようと思いました。研究留学の目的とは関係ありませんが、折々の出来事や発見が自分にとってプラスになっていると感じます。現在ダニーデンは冬至に向かっていて、毎日の川とオリオン

が自動車で、外国人が多く商店街では頻りに中国語の会話が聞こえてくる。そんな印象です。時々学生さんがスケッチをしているのを見かけます。毎週木曜日は研究グループのミーティングがあり、その週の問題点、次週の方角づけ、研究の途中報告などの検討が行われます。解剖学講座では院生を中心に毎週金曜日にジャーナルクラブという企画がティールームで開かれています。科学雑誌に掲載された論文を誰かが発表し参加者が議論する、終了後はお茶をしながらの賑やかなフリートークになる面白い企画です。いつも迷惑を掛けているので自信を持って言えるのですが、ダニーデンの人々は親切で心が広いです。学内では皆さんすれ違う時な

留学だより

バンダービルト大学医学部 メディカルセンター留学記

医学部附属病院・治験管理センター

大久保 正

昨年の八月より今年の三月末まで、米国テネシー州ナッシュビル市にあり、バンダービルト大学医学部臨床薬理部門に文部省在外研究員として留学の機会を得ましたので、バンダービルト大学のご紹介をいたしたいと思えます。

ウィルキンソン教授の研究室です。バンダービルト大学の臨床薬理部門は他にも有名な教授が多く、不整脈薬の大規模臨床研究で有名なダン・ローデン教授が部門長としておりました。この部門も非常にアカデミックで、クアリティティが高く、部門から出された論文を掲示する掲示板(一・五メートル四方)が廊下にあります。したが、重ねて貼っているにも関わらず、年に何回も貼りなおしていたのが強く印象に残っています。

が主に考えられてきました。最近では薬物トランスポーターが関与する相互作用も注目されており、今回の留学で得られた技術と知識を駆使して薬物トランスポーターが関与する薬物相互作用の研究を進展させたいと考えています。最後になりますが、今回の文部科学省在外研究員の選定に強力なご推薦とサポートを頂きました医学部並びに病院の諸先生方に心より感謝申し上げます。

バンダービルト大学は、テネシー州の州都ナッシュビル市にある私立大学であり、医学部の他に、看護学部、工学部、経済学部、法学部、芸術学部などを有する総合大学です。テネシー州は、アメリカでは南部に分類され、未だに古き良きアメリカが残っている州で、州歌にもなっている

ここで私は、主に癌の薬物耐性の原因として発見された薬物の膜輸送タンパクとして知られる MDR1 などの薬物トランスポーターの研究を培養細胞を用いて行いました。これまで薬物相互作用は、薬物代謝酵素のチトクローム P-450 の関与

座を眺めながら帰宅していますが、南十字星は一体どこにあるのかさっぱり分かりません。写真はダニーデンの世界で一番急な坂を上りきった所にあるベンチでひと休み。ダニーデンでの私の研究の先にもこのようなベンチがあるでしょうか。平成十六年五月二十七日。

コラム

医学部 こぼれ話

医学生諸君！基礎校舎の屋上に時々上つてみ給え。雄大な岩木山の眺望に浩然の気が養え、心広き医師になれること請け合いです。

よう、だと？ いや、わ、私にはそんな暇はないヨ。委員会はあつた、書類は書かなくちゃいけないし、来客はあるし、君たちにウケるように講義の準備をしないと校費も少なくなっちゃうし。



人事異動

医学部医学科

定年(16・3・31)
衛生学講座 教授 菅原 和夫
麻酔学講座 教授 松木 明知
泌尿器科学講座 教授 鈴木 唯司
内科学第一講座 助教 須藤 俊之 青森総合センター
外科学第一講座 助教 高谷 俊一 五所山原市立北中央病院
外科学第二講座 助教 森田 隆幸 青森県立中央病院
脳神経外科科学講座 助教 関谷 徹治
病理学第一講座 講師 八木橋 法登 青森市民病院

内科学第一講座 講師 田村 好弘
法医学講座 助手 三戸 聖也 八戸市立市民病院
神経精神医学講座 助手 菊地 隆 医員
眼科科学講座 助手 佐藤 元哉 むつ総合病院
耳鼻咽喉科学講座 助手 一戸 学 五所山原市立北中央病院
臨床薬理学講座 助手 高畑 武功 医員
併任(16・4・1)
副学部長 泉井 亮 評議員 佐藤 敬
細胞工芸部門 客員教授 長嶋 和郎
昇任(16・4・1)
病理学第一講座 助教 和田 龍一 病理学第二講座 講師

弘前大学医学部 臨床教授・臨床助教 称号付与者

八代 均(大館市立総合病院第三内科部長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
森田 隆幸(青森県立中央病院外科部長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
藤田 繁俊(大館市立総合病院耳鼻咽喉科部長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
北島 修哉(青森県立中央病院外科部長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
武内 俊(大館市立総合病院院長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
猪野 満(大館市立総合病院副院長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
太田 修司(青森県立中央病院耳鼻咽喉科部長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
渡辺貴和子(国立病院機構弘前病院耳鼻咽喉科医長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
西島美知春(青森県立中央病院脳神経外科部長、救命救急センター長兼務取扱)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
木村 邦之(青森県立中央病院副院長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日

分子病態部門 助教 森 文秋 分子病態部門 講師
病理学第一講座 講師 山岸 晋一朗 病理学第二講座 助 玉井 住子 内科学第一講座 助 脳神経外科科学講座 講師 嶋村 則人 脳神経外科講座 助 配置換(16・4・1)
内科学第一講座 助教 福田 眞作 光学医療診療部助教 災害・救急医学講座 助教 滝口 雅博 救急部助教
外科学第一講座 助手 柴田 滋 周産母子センター 採用(16・4・1)
解剖学第一講座 助手 小田桐 紗織
病理学第一講座 助手 水上 浩哉 医員

神経精神医学講座 助手 片貝 宏 青森市民病院
外科学第一講座 助手 板谷 博幸 医員
眼科科学講座 助手 中村 秀雄 むつ総合病院
産科婦人科学講座 助手 山本 善光 公立野辺地病院
耳鼻咽喉科学講座 助手 土岐 栄喜 青森市民病院
脳神経外科科学講座 助手 鶴谷 尚信 青森労災病院
採用(16・4・16)
内科学第一講座 助手 遠藤 哲 公立七戸病院
採用(16・5・1)
生化学第二講座 助手 清水 武史(財団法人青森大学) 昇任(16・5・1)
外科学第一講座 講師 鳴海 俊治 外科学第二講座 助

高澤 鞆子(国立病院機構弘前病院麻酔科医長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
野村 由美子(国立病院機構弘前病院小児科医長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
立花 直樹(青森県立中央病院輸血部長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
柿崎 寛(国立病院機構弘前病院整形外科医長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
盛 英機(青森県立中央病院循環器内科部長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
小沢 一浩(国立病院機構弘前病院内科医長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
竹森 弘光(青森県立中央病院医療高次長、リウマチ血液内科部長兼務)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日

臨床助教
横山 昌樹(国立病院機構弘前病院外科医)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
畑 正樹(青森県立中央病院心臓血管外科部長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
木村 太(青森県立中央病院麻酔科部長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
杉本 和彦(国立病院機構弘前病院小児科医長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日
斎藤 聡(青森県立中央病院消化器内科化学療法科部長)
平成十六年四月一日、平成十九年三月三十一日

附属病院

併任(16・3・10)
卒後臨床研修センター長 教授 加藤 博之
辞職(16・3・31)
放射線部 助教 佐々木泰輔 鳴海病院
神経科精神科 講師 岩佐 博人 青森県立精神保健福祉センター精神保健医
皮膚科 講師 水木 大介
泌尿器科 講師 川口 俊明 青森県立中央病院
麻酔科 講師 村岡 正敏 黒石病院 麻酔科医長
第二内科 助手 吉町 文暢 青森県立中央病院
第一内科 助手 白戸 研一 弘前中央病院
第三内科 助手 田野崎真人 青森県立中央病院 神経内科
小児科 助手 遠野千佳子 医員
第一外科 助手 小野 裕逸 青森県立中央病院 心臓血管外科部長
整形外科 助手 工藤 悟 青森市民病院
皮膚科 助手 菊池 康 大阪全学連伝子治療部門 非常勤研究員
泌尿器科 助手 神村 典孝 青森県立中央病院
放射線科 助手 近藤 英宏 八戸市立市民病院
形成外科 助手 山下 建 三沢市立三沢病院
併任(16・4・1)
附属病院長 教授 棟方 昭博
副病院長 教授 佐々木睦男
病院長補佐 教授 福田 幾夫
病院長補佐 教授 水沼 英樹
材料部長 教授 奥村 謙
救急部長 教授 浅利 靖

輸血部長 教授 福田 幾夫
材料部部長 助教 西川 真史
光学医療診療部部長 助教 佐々木賀広
放射線部部長 講師 青木 昌彦
昇任(16・4・1)
光学医療診療部 助教 佐々木賀広 第一内科講師
第一内科 講師 坂本 十一 第一内科助手
第二内科 講師 中村 典雄 第一内科助手
皮膚科 講師 松崎 康司 皮膚科助手
放射線科 講師 三浦 弘行 医学部助手
脳神経外科 講師 浅野研一郎 脳神経外科助手
配置換(16・4・1)
産科婦人科 講師 樋口 毅 周産母子センター講師
放射線部 講師 青木 昌彦 放射線科講師
第一内科 助手 三上 達也 光学医療診療部助手
小児科 助手 佐々木伸也 医学部小児科学講師
麻酔科 助手 橋本 浩 手術部助手
放射線科 助手 場崎 潔 放射線部助手
転任(16・4・1)
周産母子センター 助手 小山 基 国立病院機構弘前病院 外科部長
採用(16・4・1)
第一内科 助手 須藤 直行 青森労災病院
第三内科 助手 崎原 哲 板柳中央病院
神経科精神科 助手 武田 哲 公立米内総合病院
第一外科 助手 皆川 正仁 医員
第二外科 助手 梅原 豊 医員

整形外科 助手 佐藤 英樹 医員
皮膚科 助手 横山 祥平
泌尿器科 助手 山内 崇生 医員
泌尿器科 助手 米山 高弘 鷹揚研究所弘前病院
眼科 助手 山崎 仁志
脳神経外科 助手 八木橋彰憲

脳神経外科 助手 吉川 朋成
形成外科 助手 渡邊 学 医員
休職(16・4・15)
耳鼻咽喉科 助手 寺田 一仁
採用(16・5・1)
皮膚科 助手 中島 康爾 青森県立中央病院

編集後記

国の財政が傾きつつある。その結果として、半世紀の歴史を誇る弘前大学も突然荒波に放り出されることとなった。幸いにも、医学部出身の遠藤学長はじめ菅原医学部長、現兼子医学部長など、いち早く時代の流れを察知したリーダーに恵まれた。国は地方大学がこれまで果たしてきた役割の重要性に目をむける余裕がないように思える。今、全体をみまわせば、国の支援は地方大学に冷たく中央に厚い。よく解釈すれば、国の規制が緩められる時代を迎えた今、これを好機と捉えて、地方大学の持てる特徴を發揮し、特色ある「もの作り(研究)」に励むことも可能であろう。これを徐々に全国に、世界にと発信する底力が弘前大学医学部にあることも事実である。問題は資金である。期待された科研費の獲得状況も今回の広報に示されたこと、全体として内定率は右肩下がりの傾向にあり必ずしも芳しくない。外部資金といつても地方では企業の絶対数が少なく、資金導入には限りがある。とくに、弘前

地区は農業中心地域であり企業が少なく、商業の青森工業の八戸地区との連携は絶対に欠かせない。苦しまぎれに話は戦国時代に飛ぶが、かつて、徳川家康の武士団を支えたものは貧しい農業であり、豊かな金山を持つ武田信玄や商才に恵まれた織田信長とは経済基盤を異にしていた。それでも家康が最後に勝利した理由は、結束と忍耐の美学にあったと考えられる。弘前大学にもその忍耐が求められる時期が到来したのかも知れない。だとすれば、細々でも、決して倒れず、打たれ強い体質を養うほうがいづれ花が開く。そのためには横の連携が必要であり、医学部全体の総合力が問われる。もうひとつ、不況の時期こそ、医学部の最大の使命である医学教育に徹し、学生とじっくり向き合う姿勢をもつことも大切なことかも知れない。まさに、泉井学務委員長の狙いに合致する。

最後に石坂洋二郎の一節をもちってひと言、津軽は物は乏しいが、空は青く雲は白く、林檎は赤く、弘前大学は「すごい」と云われたものである。(花田 勝美記)